
寄贈品コーナー「高林寺遺跡展」

期間：平成12年1月5日(水)～2月13日(日)

この遺跡は平塚市遺跡台帳の上で、192として登録されており、その遺跡面積は86,000㎡の規模を有しています。現在まで13地点の調査が行われており、12地点まで報告がされています。この遺跡の全体的な性格は、相模国府の主要な官衙域として位置づけされるものです。掘立柱建物址や竪穴住居址が多数検出され、遺物としても身分を象徴する石製や銅製の帯飾り金具、「曹司」「政所」等の役所の施設を標記した墨書土器が出土しています。

今回の展示では、第7・9・12地点の調査成果をもとに、この地域の大きな歴史を考えてみたいと思います。その視点となるのが、第7・9地点の報告で指摘されてきた区画溝の問題です。この区画された溝状遺構は伯耆国の「国庁」(政庁とも言う)規模に匹敵するものとして、国衙施設でも最も重要な「儀式の場」として位置づけされてきましたが、12地点の調査と報告では中世の区画溝と変更されました。このために、相模国府(大住国府)そのものの国衙構造(役所の諸施設)がどのような配置構造であったか分からなくなりました。従って、国庁の確認が最も重要な課題となっているのが現状です。

区画溝が中世のものとするれば、どのような性格のものであったかが問題点となります。何れにしても、遺跡の様相は、古代と中世ではこの地域の景観が大きく変わったことを示しています。その背景には何があったのでしょうか。この鍵が分かれば、国府が大磯町に移転した謎が解けそうです。



論議を呼ぶ区画溝